

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

境 究

『モモ』と考える時間とお金の秘密

書肆心水

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

『モモ』と考える時間とお金の秘密

目次

# SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

序章 『ササ』 11

時間、いのち、お金

日常の時間 25  
時間、空間、いのち 36  
ファンタジーとしての時間 43

時間をつくる 52  
時間とお金 63

時間どろぼう

灰色の男たち 83  
モモは敗北していた 97  
子どもたち 103  
社会的引きこもり 111

III

9 8 7 6

II

5 4 3 2 1

I

SAMPLE  
Sheshi-Shinsui.com

21 20 19 18 17 V 16 15 IV 14 13 12 11 10

モモの新しい闘い	121
古代の時間貯蓄銀行	130
中世の時間貯蓄銀行	147
時間と資本	156
二種類のお金	172
お金の根源	
迂回作戦	187
モモの新しい村	197
新しい思考	
社会有機体	207
意識の跳躍	220
エンデと人智学	231
科学知と芸術知	242
意識の跳躍はすでに起きていた	255
終章 エンデからのはじめまり	268

SAKAI  
SAMPLE  
Shishi-Shinrui.com

あとがき	273
文献一覧	277
内容索引	284

# SAMPLE

## Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

『モモ』と考える時間とお金の秘密

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

©SAKAI Takeshi

# SAMPLE ShoshiShinsui.com

## 本書中の表記法について

- \* 引用文の出所は書名と頁数を本文中に示し、巻末の文献一覧に発行所などの情報をまとめて記しました（『全集』は『エンデ全集』のことです）。
- \* 『モモ』からの引用は基本的に振りがなを省略しました。
- \* 引用文のなかで、漢字／ひらがな表記を変更させていただいたものが少しあります。例えば「私／わたし」「一人／ひとり」「盗む／ぬすむ」「行う／おこなう」といったものです。また振りがなを補つたところが少しあります。『モモ』からの引用については訳文のとおりに示しました。
- \* 引用文の中略箇所は（……）で示しました。

## 序章 『モモ』

内部と外部 アンチ・ヒーロー モモとは社会

### 内部と外部

ミヒヤエル・エンデの『モモ』を読んだことがありますか？

主人公モモはどこからか円形劇場跡にやつてきて、そこに住み着いている女の子です。他の登場人物はモモの友だちで、お話し上手な観光ガイドのジジ、寡黙な道路掃除夫ベッポ、それに近所の人たちですが、なんといつても主役は、いつも葉巻をくゆらせている灰色の男たちや、どこにもない時間の国に住んでいる妖精のマイスター・ホラです。あと、物語を動かしていくカメのカシオペイアがいないとお話しになりません。このカメは時空を渡り歩ける力をもち、時

間の国へたどり着く道を知っています。そのうえ、甲羅に文字を浮かび上がらせて、モモたちと会話ををするのです。

この物語のテーマは時間です。時間についてのファンタジックなお話と、時間どろぼうとモモたちのせめぎあいが、ストーリーの中心を占めています。紹介はこのくらいにして、『モモ』について、エンデ自身の語るところを聞いてみましょう。

『モモ』には、ともかく六年間費しました。（……）なぜわたしは、この作品を仕上げられなかつたか？　それは、遊び（（引用者））のルールが見つからなかつたからです！　『モモ』では、なん度も、それを手にしたと思った後、没<sup>ボツ</sup>にし、新たに考え出す、といったことを続けながら、長いことかかつて、ようやくたどりついたのです。わたしは、なぜ時間どろぼうが、あらゆる人から時間をぬすめるのに、モモからはそれができないのか、その理由を見つけ出すことが、どうしてもできなかつたのです。その理由は、形而上<sup>けいじじょう</sup>的なものであつたり、倫理<sup>りんり</sup>的なものであつたりしてはならない。そうしたものではなくて、明快な遊び（（引用者））のルールの存在が、必要だつたのです。（……）ある朝<sup>あさ</sup>朝食をとつている時、とつぜん、稻妻のようにひらめいたのです。時間は、それを節約して貯めこむ人からだけぬすめるものだと。だつて、時

SAMPLE  
ShishiShinsui.com

序章 『モモ』

間を使う者は、時間を所有しませんからね。そうした者から、時間をぬすむことはできません。そして、このひらめきに伴って、時間貯蓄銀行のアイデアが浮び、とつぜん、物語全体が動き出したのです。こうして、わたしは、この物語を書き上げることができました。登場人物は、すでに全員揃っていました。彼らは、出番を待つばかりになっていたのです。」（『ミヒヤエル・エンデ』三一〇二頁）

エンデは別のところで「なにかある作品を書きはじめるとき、最後はどうなるのか、わたしにはまるでわからない。わたしとしては、そのときそのときに書きながら、決定するだけなのです」（全集一六、五二頁）と述べています。はじめから構想があつて、その構想のもとに書いていくのではなく、書いているうちに物語のルールができてきて、そのルールを育てながら書いていくという事になります。

『モモ』はエンデの本のなかでも社会批判が鋭く、反体制的な本だとみられていますが、このような創作の方法に従っているエンデにすれば、社会批判が意図されていたわけではない、という事になります。

『モモ』で産業社会の諸問題が解決できるなんて思うのは、誤解もいいところだ。そんなつ

もりはなかつたし、それを目標にしたわけでもない。むしろぼくは、今日の社会の姿を内面的な絵図に移しかえたかつた。」（全集一五、五一頁）

「ぼくはね、『モモ』を書くとき、そんな社会批判をやる気など、これっぽっちもなかつた。いわば、自然のなりゆきとしてそなつただけだ。當時ぼくは、純粹に詩的なことがらを気にしていた。それは、ぼくにとって、文化のコンセプト全体にかかわることなんだ。つまり、内部の世界を外部の世界にかえ、外部の世界を内部の世界にかえて、その結果、一方が他方のなかで再認識される。そうすることによってのみ、人間は自分の世界でくつろいだ気分になれる。そうでないとき人間は、世界でよそ者のままだ。というわけで、ぼくにとっては、現代のぼくらの世界の外的なイメージを内的なイメージにかえることが、重要だつたんだ。ほんとうにぼくは、中世の昔話の語り手がやつたのとおなじことを、やりたかつたにすぎない。」（全集一五、二三三頁）

エンデによれば、中世の昔話に出てくる森、王、魔女、狼は、語り手の周囲に現実に存在したもののがイメージで、詩的鍊金術れんきんじゅつによてそれが内的なイメージにかえられて心や精神に関する表現となつたのです。そしてそうすることで、はじめて、世界は経験の対象となる、という

序章 『モモ』

の  
で  
す。

「芸術は、つくる」としかできない。説明はできない。美は、つくることしかできない。説明することはできません」（全集一六、二三三頁）と述べているように、エンデは自分の作品を解釈の対象としてではなく、経験すべき対象と考えているのです。

### アンチ・ヒーロー

「ぼくは『モモ』で、あるひとつの人間の態度、ひとつの人間像を描こうとした。お望みなら、アンチ・ヒーローといつてもいい。」（全集一五、五三頁）

エンデにとつて、外的イメージを内的イメージに転換しようとするとき、問題は、現代社会にあつては外的なものが内的なものとの結びつきを失っていることにありました。だから、現代社会に詩的鍊金術をほどこすと「現代の恐ろしい姿が描かれてしま」（全集一五、二三四頁）うことになつたのです。そこで、エンデにとつては「反人間的なシステムを描くこと」（全集一五、五二頁）が重要になつてきます。そうすると西部劇に出てくる主人公のような、悪者が皆撃ち殺されて平和と秩序がもどつてくるといったヒーローを採用できないというのです。

「工業技術というのは、人間の共同体が創造したものであり、多くの人びとの共同体的作業や成果があるからこそ、自由に使いこなせるようになっている。そういうことは、たったひとりのモモにはできない相談だ。とはいえるモモは、そういう共同体をつくる手伝いができる。要するにぼくはモモを、灰色の紳士たちに対抗するタイプにしたかったんだ。とはいえる、ひとりぼっちで友だちがいないとき、モモはだれよりも無力だ。だからこそモモには友だちが必要なんだ。でないとモモは破滅する。」（全集一五、五四頁）

現代社会を内面化すると、それが人間の内的世界との結びつきが切れてしまっていることが判明します。だから、アンチ・ヒーローのモモは、灰色の男に対抗するだけでなく、新しい共同体の形成の必要性とその方向性をも示唆している、とエンデは考えているのです。そこでアンチ・ヒーローの性格も決まっていきます。

「たとえばぼくは、『モモ』で、まったく別なヒーローのタイプを発見しようとした。もつともそれは、すでにぼくたちが話題にしているものだけどね。ふつうヒーローというのは、行動的な人間というものが相場だ。そこでぼくとしては、まさになにもしないことによつてヒーローであるようなヒーローをつくろうと思つたわけ。（……）だからぼくは、人間の子どもにしよ

序章 『モモ』

うと思つたんだ。行為ではなく存在、たんにそこにいるだけでヒーローであるような子どもを描こうとした。モモはなにもしない。いちどドアを開け、いちどドアをしめる。モモがすることは、それだけだ。」（全集一五、五六頁）

新しい共同体をつくる手伝いをするモモ、モモは灰色の男たちに対抗します。でも「産業社会の諸問題の具体的なレディ・メイドの解決法を書きこんだ物語とか童話。そういうものを創作することは、はつきりいつて、無理だと思う。モデルとして解決法をしめすことすら無理だと思うな。作家の使命は、社会意識をつくりだすことだけじゃないか」（全集一五、五三頁）と考へているエンデにとつて、物語としては「モモは、なにか新しいことを世界にもちこむ。モモは人間たちに星の声をうたつてきかせる。もしかしたらそのことによつて世界が変わるかもしれない」（全集一五、五九頁）と述べるにとどめています。もちろんこの示唆は、具体的にはモモがマイスター・ホラに時間の花を見せてもらう場面が念頭におかれています。

ところで、『モモ』についてのさまざまな読みがなされるなかで、文学には「時折には、作家が大体気づいているよりも、はるかに深い意味のことが成り立つ。あとになつてから、書いた文になん重もの意味があることがわかつてくるのですが、たいていはそうしようとするので

「はなくて、それは起きるのです」（『ものがたりの余白』一一頁）とエンデは述べています。そして、「自分が書いた本を理解していないというのは、作家にはよくあるのです」（同、三五頁）とも語っています。主人公モモについても、エンデの考えとは別の意味があるに違いありません。この本ではこの別の意味を考えてみます。それで、『モモ』を読んでいなくともさしつかえないよう書いてみました。また、「新しい思考」と名づけられたエンデのその後の考え方を紹介し、これを踏まえて、わたし自身の考え方を少しだけ述べてみました。

### モモとは社会

物語では、モモはみなし児で、どこからかやつてきて、皆に世話をしてもらっている女の子ということになっています。この子の唯一といつてもよい力は、人の話を聞くことができる、というものでした。そして、やがて大きく成長することに備えて、ダブダブの男物の上衣<sup>うわぎ</sup>を着ています。

モモが来て、話を聞いてくれることで、大人も子どもも、それまではなかつた経験をします。人びとはそこで、人と人との楽しい触れあいを得たのでした。人びとはモモに話を聞いてもら

序章 『モモ』

うことで、自分自身を取り戻すことができます。喧嘩けんかをしていた大人は仲直りできるし、子どもたちは、モモがいるだけで楽しく遊べます。ここには人びとが楽しく触れ合いながら暮らしていける社会がイメージされています。

この人間らしい社会は、時間どろぼうである灰色の男たちが登場し、彼らが大人を支配していくことで過去のものとなつていきます。灰色の男たちは、死んだものでいのちをつないでいて、人間の姿をしてはいるが人間ではなく、ほんとうはいないはずのものです。人間がそういうものの発生をゆるす条件を作り出していることで、この世に登場したものでした。

灰色の男たちの本性がこういうものですから、人間はその気になれば彼らをかたづけてしまうことができるのですが、しかし、灰色の男たちは人間の意志を支配していて、人間にとつてはこの男たちの意志が自分の自發的意志としか思えないでの、なかなかそれをかたづける気になれません。

そのうち灰色の男たちは人間の時間をひとりひとりからぬすむのではなく、まるごと得ることを画策かくさくします。この状態は人間の社会の終末を意味しています。この極限に直面して、モモは人間以外のものの力を借りて、灰色の男を消滅させました。

物語のなかで、マイスター・ホラは、灰色の男たちが人間の姿をしてはいるが、人間ではないことを暴きました。<sup>あば</sup> 実はモモも、人の話の上手な聞き手でした。このときモモは他者の姿を映す鏡となっています。この鏡とは、実は社会のことですが、それは見えないものなので、モモの仕事はだれにも気づかれずになりますことができます。

またモモは、皆に世話をされている子どもとして描かれています。しかし人間が社会をつくれば、人間は自分自身だけでなく、社会の世話を共同でしなければなりません。

さらに、モモは、自分の年齢を一〇〇歳か一〇二歳と思つていました。これは近代市民社会の年齢とたいしてかわりません。そして、近代市民社会は一〇〇歳になつてもまだ子どもで、この社会の大人たちは、時間貯蓄銀行への時間貯蓄を勧める灰色の男たちのいいなりになつているのです。

だから、モモの灰色の男たちとの闘いは、人間よりも社会の方が先に時間どろぼうに反逆した、ということでした。このモモの闘いは、書かれてから後の三〇年間の歴史からすれば、じつさいには敗北していたと見るほかはありません。それ以降社会はどうなつたのでしょうか。これがこの本のテーマです。でも、先を急がず、『モモ』で描かれている美しい時間のファンタ

SAMPLE  
Shishi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

序章 『モモ』

ジーから体験していきましょう。

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

四つの時間意識 時間の目的 時間貯蓄銀行

#### 四つの時間意識

太古の人びとがもつていた振動する時間、という時間意識が、古代になると、循環する時間、という時間意識へと変化していった、ということについてはすでに見ました。ここでは、時間意識の比較を試みてみましょう。真木悠介の『時間の比較社会学』は時間意識について四つの形態を取りだして、その特徴を論じています。

「クルマンはキリスト教の時間についてのそのよく知られた著書の中で、つぎのようについて。『われわれは時間の表象が、ヘレニズムにおいては円環であるのにたいして、原始キリスト

時間貯蓄とお金

教、聖書的ユダヤ教およびイランの宗教にとつては上昇する線であるという、この根本認識から出発しなければならない。』（『キリストと時』）

クルマンが注記するように、それはユダヤの終末論についてのヘルシャーの研究をはじめ、すでに多くの人びとによつて追認されてきている、ヘレニズムとヘブライズムとの時間意識の対照性である。

クルマンはさらにギリシャ思想との対比において、つぎのようにいう。

『新約聖書の時間上の表現で、時間を抽象的にとりあげているものはひとつもない。『クロス』とてもその例にもれない。この語は、ギリシャ哲学においては、時間をそれ自身として、その問題性において表わすように用いられているが、新約ではそのように用いられてはいない。』すなわちヘブライズムは、その顕著に時間論的な発想にもかかわらず、ギリシャ人のように『時間』というものをそれ 자체として対象化して語ることがなかつた。』（五八九頁）

真木は、クルマンの言うようにヘレニズム、つまりギリシャ思想の時間意識は円環であるのに対し、ヘブライズム、つまりキリスト教の時間意識は線分であるが、それらにさらに、先史時代の人びとの振動する時間と、近代社会の量ではかる直線的時間を加え、時間意識の四つの

時間と資本

形態を類型化しています。

真木は、ヘブライズムの時間が、クルマンが言うように、はじめと終わりが問題とされ、それを区別することで直線がイメージされざるをえない、という考えを受け容れながら、しかし、そこでの時間は量の観念を欠いているので、これを線分的時間意識とみなし、今日の直線的な時間意識と区別したのでした。そこで、真木の本から、ギリシャの円環する時間について引用されている文章を紹介しておきましょう。

「事物は、みずから発生したところの元のものへ、もういちど帰つてゆくのが定めである。なぜならもろもろの事物は、みずからの不正のために、時間の秩序づけに従つて、相互につぐないをして満足させあうからである。」（同、一六六頁）

これはアナクシマンドロスの断片ですが、ピュタゴラス派は「ひとつものと多くのものが時の円環のまわるにしたがつて優勢を占める」（同、一六七頁）と述べ、ここに真木は、完成された円環する時間のイメージを求めています。

真木はこのような時間意識が生まれてきた背景には、<sup>ちゅうか</sup>鑄貨の発明と外国貿易の発展による商人的貴族の形成によって生み出されてきた富を貨幣で尺度する富の数量化を反映して、時間

時間貯蓄とお金

の数量化と、それによる自然法則の了解があつたと述べています。そして、もともとは輪廻転生りんねんしやうといつた宗教的なイメージが、円環を無限ととらえることで時間を数量化する自然学的なものへと変換されてきたというのです。

### 時間の目的

現代では時間は、農作物や天体の運動といった具体的な事物とは関係を断たれた直線的に進行する抽象的ななか、と考えられています。そして、この抽象的な時間が、逆転して、具体的なものの運動の尺度となっています。わたしたちは時間に間に合う、時間に間に合わない、といった感情にいつもとりつかれてしまっているのです。

これはどうしてそうなるのでしょうか。もともと具体的な事物の振動に発し、その運動の過程が時間があつたのに、この時間が事物から切り離されて、逆に事物の運動の経過を計る抽象的な時間となりました。このことは言語や思考の成立と同じことで、人間の意識が現実をとらえるときに陥る不可避的な事態でした。ではなぜ、時間の方が、わたしたちの生活という具体的な事物をしばつていくのでしょうか。

SAMPLE  
Shishi-Shinsui.com

時間と資本

さきに時間がどうしてお金になるかについて考察し、そのポイントは、お金が自分自身を増殖するお金、つまりは資本に転化するからではないかと問うてみました。この見地からすれば、自分自身を増殖するお金は、時間とともに増大していきますから、時間の目的となります。「時間は金なり」のことわざ通り、時間がお金になると、お金を増やすという目的が時間の目的となります。この黄金色に染められた時間が、わたしたちの日常をしばつているのではないでしようか。

近代に成立し、今日の産業の中心となつてゐる生産システムは産業資本によるものですが、具体的には、株式会社に代表される営利事業です。製造業の例を引くと分かりやすいのですが、会社はお金を集めて資本とし、それで、商品の製造に必要な原材料及び機械を買い、さらに社員を雇い入れて生産物を製造し、それを商品として売ると利潤が生まれる、ということでした。

資本が最初に仕入れた生産要素も商品として買ったものですから、その価格よりも生産した商品の価格の方が増大していなければ、営利事業にはなりません。古典経済学は、その根拠に、生産で支出された働く人の労働が、価値を増やす要因のひとつだと考えました。

ところが古代に成立した商人資本や銀行の場合、このようなシステムとは異なつていました。

時間貯蓄とお金

商人は安く買って高く売ることで利益を得ますが、遠隔地からの運送を別にして、商品の生産のために労働することはありません。また、高利貸などの銀行家の場合は、お金を貸しつけて利子をとるわけですから、お金自身に働かせている、というイメージで、その背後にある財の生産はすっかり見えなくなっています。なんらかの財の生産や営利事業がないと、債務者は利子すら払えないにもかかわらず、そのことはいつかい隠されてしまいます。

第二次大戦によつて荒廃したアジアとヨーロッパに株式会社による製造業が復活し、七〇年頃までは製造業を核とする産業が社会システムの中心を担つていました。<sup>にな</sup>商業や銀行は産業を育成するための装置として、従属性的な地位にあつたのです。ところが、七〇年代になると、後で詳しく見るよう<sup>にな</sup>に世界に根本的な変化があらわれます。その思想的な反映として、お金の価値の実体的な<sup>にな</sup>担い手が労働であるという考えも否定されるようになつてきました。

### 時間貯蓄銀行

エンデは時間どろぼうの構想を考えたとき、なぜ人間の時間をぬすむことができるのか、ということについて「明快なゲームのルール」が必要だと述べていましたね。そして、そのルー

時間と資本

ルは「時間は、それを節約して貯め込む人からだけぬすめるもの」というものでした。このルールから、これまで成立してきた時間貯蓄銀行を考察して、まとめてかえましょう。

古代では「貯め込む人」は、個人ではなく、共同体であり、都市であり、国家でした。これは人びとにとっては超人的な存在でしたから、自然と同様に神として認識されました。神殿が時間貯蓄銀行となり、人びとが生産した剩余がそこに献上されます。古代ギリシャのように、ポリスに市場が開かれて、市民個人が売買する地平にまで進んだ地域でも、時間をお金に変える資本は、商業と銀行にしか生まれず、他方で産業は奴隸制だったため、生産技術を進歩させられず、この分野では資本は生まれませんでした。

中世になると、農業が発達しますが、土地所有が私的所有ではなくて領主制となり、商業や銀行とはぜんぜん別のタイプの貯め込みが台頭してきます。領主や貴族が、土地所有によつて封建的な支配権を確立し、農民にたいして吸取者としてあらわれますが、残つているものはお城くらいで、時間貯蓄銀行としてはみすぼらしいものです。それと比べてヨーロッパではキリスト教が本来の時間貯蓄銀行となり、たくさんの教会堂を残しました。

古代にしても中世にしても、時間貯蓄銀行は、神殿であり、教会でした。ということは、黄

時間貯蓄とお金

金色の神々だった、ということになります。神とは、人びとが社会を形成したときに社会がもつ力を想像力によつて人格化したものであり、それは人びとの集団的な力であるにもかかわらず、人間を超えた存在としてあがめられました。人びとがまだ神々を自分たちの社会的で集合的な力が外化したものであると見抜けなかつた限りにおいて、神々への信仰は、人びとを社会にまとめあげるという効力を發揮させることになりました。そして、黄金色の神々は、吸取者として人びとから一〇分の一税を集めただけでなく、時間がお金になつたときには、免罪符（ローマ・カトリック教会における罪の償いを免除する証書）という天国への切符を賣ることで王侯貴族や大商人たちから富を吸い上げたのでした。

宗教の場合の蓄財は、エンデのルールからしたら、どうなるでしようか。領主や貴族は土地などの生産手段に対する支配にもとづいて蓄財したわけですから、吸取者のイメージは領主その人のことであり、ストレートに描けます。しかし、宗教的権威による信仰の形成と、信仰にもとづく寄進はイデオロギー的関係にもとづくものですね。むしろ、個々人が時間貯蓄することへの否定と批判がその土台にあるように思われます。その意味で、タイプとしては、利子をとる高利貸と類似しています。高利貸はお金それ自身が債務者の時間をぬすみます。それと同

時間と資本

# SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

じように、キリスト教の場合、<sup>ひゆ</sup>比喩的に言えば、神が黄金色をした吸取者で、じつさいの吸取者集団は聖職者として、白色の男たちとしてある、と言えるかも知れません。では、現代の時間貯蓄銀行はどうでしようか。この謎を解くためにはお金について考察することが不可欠です。

13

## 二種類のお金

お金とはなにか 現代のお金の弊害  
お金の商品化の実情 現代の時間貯蓄銀行 変動相場制と  
投機の常態化

### お金とはなにか

『エンデの遺言』は、金融システムを批判したエンデの次のことばから始まっています。  
「どう考へてもおかしいのは資本主義体制下の金融システムではないでしようか。人間が生きていくことのすべて、つまり個人の価値観から世界像まで、経済活動と結びつかないものはありません。問題の根源はお金にあるのです。」（二四頁）

このことばは、エンデが亡くなる一年六ヶ月前、一九九四年二月六日のものでした。そうです。晩年のエンデはお金と金融システムについて必死に研究していたのです。エンデは、貨幣

二種類のお金

の歴史を調べ、金、銀といったそれ自身に価値のあるものから紙幣の発明にいたり、さらにコンピュータに記録されている数字が加わる、といった変遷について述べたあと、国家紙幣と銀行券の区別について興味のある事実を述べています。

「その後、紙幣はまったく別の道をたどり銀行券となりました。この銀行券というのもとても興味深いもので、わたしは一〇人の法律家に手紙を書き、法律的見地から銀行券とはなにかと尋ねました。それは『法的権利』なのか、国家がそれを保証するのか。もしそうなら『お金』は経済領域には属さず、法的単位ということになります。『法的権利』なら商いの対象にはできません。しかし、そうではなく経済領域に属するものなら、それは商品といえます。一〇人の法律家からは一〇通りの返答がきました。つまり、法的に見て、銀行券とはなんなのかをわたくしたちはまるで知らないわけです。定義はいちどもされませんでした。（……）だからこそ、『お金』はひとり歩きするのです。」（同、二五頁）

国家紙幣は国家が保証するもので、貨幣金のシンボルであり、一国の流通に必要な金貨の量と同じ額の紙幣が発行されておれば、金貨と同じ価値をもつことができます。しかし、それは金貨や銀貨どちらがつて増発することができるので、国家は財政が不足し始めるといい増発する

時間貯蓄とお金

ことになり、そうなるとインフレになつて紙幣の価値が低下します。

他方、銀行券はもともと私営の銀行が発行する預金証書でした。だが、企業や個人の預金口座を引き受け、それでそれぞれの取引を口座の振替で決済することができるようになり、預金は貨幣として使われ始めます。このシステムが銀行を作り出し、この支払決済システムを土台にして信用制度が発達してきますと、大口の取引は、口座振替で債権・債務関係を相殺する預金通貨でなされるようになります。銀行券や預金通貨は、金貨や国家紙幣と区別されて信用貨幣と呼ばれています。

預金通貨の役割が増大してきますと、銀行券は小口の取引からなる最終消費財の売買に使われるようになります。銀行はやがて商業銀行と発券銀行とに分化し、発券業務は中央銀行の「占権」事項となるとともに、中央銀行券が法貨(法定貨幣)とされます。こうして、今日の日銀券は日本銀行が発行した信用貨幣ですが、同時に日本国政府の法貨としてあり、国家紙幣としての性格ももつています。

このようにお金について、いろいろと説明はできるのですが、エンデも言うように、銀行券とはなにか、お金とはなにかと問われると、だれもきちんと答えられません。

二種類のお金

### 現代のお金の弊害

お金とはなにかということに答えられはしませんが、しかし現代社会でお金が果しているよくない役割については逐一述べることができます。

エンデは、貨幣経済が自然資源と調和していないことについていろいろあげています。たとえば経済理論では地中に眠る資源や熱帯雨林はまだ経済的要因ではなく、掘り出され、伐採されではじめて経済的要因とされます。これでは資源の浪費を起こさざるを得ません。あるいは短期的利益のために、畑を荒らし、土壤を不毛にすることになります。

「つまり、非良心的な行動が褒美を受け、良心的に行動すると経済的に破滅するのがいまの経済システムです。この経済システムは、それ自体が非倫理的です。わたしの考えでは、その原因は今日の貨幣、つまり好きなだけ増やすことができる紙幣がいまだに仕事や物的価値の等価代償だとみなされている錯誤にあります。これはどうの昔にそうでなくなっています。貨幣はひとり歩きしているのです。」（『エンデの遺言』、二八頁）

今日の金融システムが人間の生活にもたらしている弊害、これについては多くの人が認めざ

るをえなくなつてきています。ところがどうすればいいか、ということになると明確な答えはありません。そこでエンデは、貨幣システムの変革を提案しています。

「重要なポイントは、パン屋でパンを買う購入代金としてのお金と、株式取引所で扱われる資本としてのお金は、ふたつの異なる種類のお金であるという認識です。大規模資本としてのお金は、通常マネージャーが管理して最大の利潤を生むように投資されます。そして資本は増え、成長します。とくに先進国の資本はとどまるなどを知らぬかのように増えづけ、そして世界の五分の四はますます貧しくなつてきます。というのもこの成長は無からくるのではなく、どこかがその犠牲になつているからです。そこでわたしが考えるのは、再度、貨幣を実際になされた労働や物的価値の等価代償として取り戻すためには、いまの貨幣システムのなにを変えるべきなのか、ということです。これは人類がこの惑星上で今後も生存できるかどうかを決める決定的な問い合わせであると、わたしは思っています。」（同、二八九頁）

この貨幣システムの変革の一例として、エンデは、シルビオ・ゲゼルの老化する貨幣論とヴエルグルでの実行例とをあげています。ゲゼルは、お金で買ったものは消費され老化していきますが、お金はそうならないところに問題があると考え、スタンプ紙幣を考案しました。そ

二種類のお金

れは毎月定められた日に定められたスタンプを紙幣の裏に貼り付けないと通用しないものでした。この紙幣は、スタンプの欄が埋まつてしまふと死んだと見なされ、回収されます。

ヴエルグルでは一九二九年の世界大恐慌後にこのスタンプ紙幣が導入され、大きな成果をあげましたが、オーストリア政府は権力を行使してこの試みを止めさせてしました。

今日では利子のつかない地域通貨の試みが世界各地でなされています。『エンデの遺言』でも、イサカアワー（ニューヨーク州の学園都市）イサカの発券型地域通貨都市 や交換リング（旧東ドイツのハレ市で始まつた通帳型の地域通貨 レッツ）などが紹介されています。ただ LETS (Local Exchange Trading System) についてはあまり触れられていないので不満が残ります。

### お金の商品化が問題

エンデはゲゼルの老化する貨幣という考え方とスタンプ紙幣の実践に大きな意義を認めていますが、しかしそれで問題が解決すると考えていたわけではありません。「わたしたちがいつも耳にする提案は、システム自体は変えずに、それをちょっと賢くするとか、システムがもたらす結果を少しあとにずらそうというものばかりです」(同、三〇頁)と不満を述べているエンデ

にとつて、なすべき課題は金融システムの改革であり、そのためにはシステムの改革案の他に、メンタリティの変革も必要ですが、後者の方が大変だとみています。

ともかく、エンデは金融システムの改革の中身について次のように述べています。

「わたしの見るところ、現代のお金がもつ本来の問題は、お金自体が商品として売買されていることです。本来、等価代償であるべきお金が、それ自体が商品になつたこと、これが決定的な問題です。そのことにおいて、貨幣というもののなかに、貨幣の本質を歪めるものが入るのではないか。これが核心の問題だと思います。もつとも、これはわたしの考えであつて、経済学者は別意見かもしません。」（同、三五頁）

お金自体が商品として売買される事態について分析したのは、カール・マルクスの『資本論』第三巻でした。ゲゼルはマルクスの貨幣論について批判していますが、（同、一〇六～一六頁）マルクスが貨幣や資本の商品化を論じた第三巻を参考していないのですから、批判は的外れに終わっています。そして、ゲゼルには、利潤と利子との区別が理解されていないので、資本がもたらす剩余は全てが利子だとされています。

エンデの考えは、マルクスが利子生み資本論で展開した現実資本と架空資本についての理論

二種類のお金

と一致しています。そこでマルクスの理論を簡単に紹介してみましょう。

今日産業の分野では資本が生産の担い手になっています。産業資本とは産業の分野に投下された資本のことですが、こうなったのは、近代以降のことでした。すでに見たように古代や中世にあつては、人間は産業資本が発生するような条件を許してはいなかつたのです。でもそれまでにも貨幣は存在し、資本も存在していました。高利貸と商人がその担い手でした。高利資本はその当時は今日の消費者金融よりも高い利子をとつていたのです。

ところが、産業の分野に資本が投下され、労働者を雇用して生産がなされる時代が始まりました。灰色の男たちが生み出され、その命令を自分の意志であると思い込む企業家たちや労働者たちが登場し、産業の工業化と社会の近代化をなしとげ、絶え間のない技術革新による生産力の増大を実現しようとしています。この時代に、貨幣の貸し手は、企業家に投資をするようになりました。こうして、高利資本に代わって、近代的利子生み資本が登場し、産業の発展とともに力をつけてきます。

貨幣の貸し手にとって、消費者に貸すよりも企業に投資する方が金額も大きく、リスクも少なくなります。また、企業も、融資によつて大きくなることで、同業他社との競争に優位にた

てますが、しかし、企業があげる利益以上の利子を払うわけにはいきません。貸し手自体が企業となり、金融機関となつて、金利生活者だけでなく、働く人びとや企業からの預金を受け付け、貸付可能な貨幣の量を増大させました。そこで、利子率が引き下げられるとともに、高利を禁止する利息制限法が設けられることになります。実はここまででは、まだモモの物語の世界でした。ところがモモの敗北で様子が違つてきます。

### お金の商品化の実情

六〇年代末にたびたびドル危機がありました。当時の国際通貨ドルは、各国通貨と固定したレートで交換されていましたが、第二次世界大戦後のヨーロッパと日本の戦後復興によつて、世界経済における各国のバランスが変化し、ヨーロッパと日本の製品がどんどんアメリカに輸出され始め、ヨーロッパや日本にはドル債権がたまつていつたのです。

当時ドルは、国内通貨としては不換紙幣(発行者が、紙幣所持者の要求があつても本位貨幣と引き換える義務を負わない紙幣) でしたが、国際通貨としては金とリンクしていました。そこで各国はインフレ気味のドル債権を抱えているよりも世界貨幣として通用するそれ自身価値物である金の方を選好し、アメリカから金が流出した

二種類のお金

の  
で  
す。

物語のなかでは灰色の男たちは葉巻のけむりという毒でマイスター・ホラおびやを脅かしたのですが、現実には、金の流出とドル紙幣の減価が世界を脅したのでした。マイスター・ホラが妥協だきょうし、一九七一年にニクソンは、金・ドル交換停止を決定します。この事態は金融システムの危機を、産業資本（現実資本）の見地からではなく、利子生み資本（架空資本）の見地からシステムを改革することで、乗り越えることを意味していました。ここで灰色の男たちは、ひとりひとりから時間をぬすむ現実資本から、人間の時間をまとめてぬすむ架空資本へと進化したのでした。

これまでには、人間はせつせと働いて生活費以外は全て時間貯蓄銀行に預ける、という形で時間を使はずまれてきました。ところが以降は、人間は働くためにはまず時間貯蓄銀行から時間を借りなければならなくなつたのです。人間だけでなく、産業でもそうなりました。

産業資本に貨幣を貸し付ける利子生み資本は、資本を商品化します。この場合、資本は貨幣資本ですから、現実には貨幣が商品として売買され、債務証書が商品に、利子を資本還元した額がその価格とみなされます。また、株式会社に出資する場合は株式が商品に、配当を資本還

時間貯蓄とお金

元した額がその価格とみなされます。

お金が商品となるといつても、お金がお金と交換されるわけではありません。お金を借した証書、あるいは出資した証書、いわゆる利付証書が商品として売買されるのです。だから、お金が商品化されると、その商品の本性は、将来の生産に対する請求権だということになります。さらに利子は将来の利益に対する請求権であるにもかかわらず、その利益が実現する以前から支払わねばなりません。このような商品化されたお金は、商品の売買で流通しているお金とはぜんぜん別の性格をもっています。

パンを買う購入代金としてのお金と、株式取引所で扱われる資本としてのお金を、ふたつの異なる種類のお金ととらえ、お金自身が商品となつたことが決定的な問題と考えているエンデの直感は、すでに述べてきたマルクスの理論を事实上踏まえたものと言えるのではないでしょうか。

### 現代の時間貯蓄銀行

時間がどうしてお金になるのか、この謎は、お金が自己を増殖する資本となることで、時間

二種類のお金

に自己増殖という目的が生まれるところにありました。そして、古代や中世にあっては、商業資本や高利資本は生まれていましたが、産業資本はまだなかつたのです。この時代には社会の生産の中心は奴隸や隸属農民にになわれていて、社会の富は城や神殿や教会堂の形をとつていました。

奴隸や隸属農民が作り出した剩余の生産物が吸い上げられる仕組みは、灰色の男たちとの契約ではなく、共同体に属していること自体に組み込まれていました。人格的な独立がなかつたので、奴隸や隸属農民は、共同体にとつては、土地の自然的な条件と同列に置かれていたのです。

そこでは共同体の維持が目的とされていました。それで、戦争に負けてしまわない限り、富は共同体に蓄積されますが、それはそれ自体では増殖せず、モニュメントの建設に使われることで、共同体を主宰する人びとの権威を増大することに役立てられたのでした。

これまで神殿や教会堂を時間貯蓄銀行と呼んできましたが、エンデのルールを正確に当てはめるなら、別の呼び名が必要でしょう。今はそこまで詮索せず、社会の富の集積場という広い意味で時間貯蓄銀行を位置づけておきましょう。そうすると、現在の時間貯蓄銀行のゆがみが見

時間貯蓄とお金

えできます。

働く人たちが灰色の男たちと契約するためには、奴隸や隸属農民が人身的な隸属から解放され、自由で独立した人格となることが必要です。また働く人たちが生産手段として役立つ大地からも切り離されないと、灰色の男たちと契約したりしません。近代になつてこのような人たちが大勢現れ、灰色の男たちと契約し、時間貯蓄に励んだところ、その節約した時間が盗まれて時間貯蓄銀行に蓄えられ、それがますます自己増殖していくつて、やがては時間そのものを借りなければ働けなくなる、このような経過の中で、現在の時間貯蓄銀行自体はどうなつているのでしょうか。

物語では建設現場の地下の奥深くに金庫があるという設定ですが、現実をみれば、現代ではピラミッドや神殿や教会堂のような文化財はどこにも見当たりません。というのも他人の時間を盗む時間どろぼうの存在は、社会の維持を目的としているのではなく、私的個人の私的な富の増殖を目的にしているのですね。そしてこの目的は富の所有者の意思にかかわりなく、自己増殖するという資本の本性に支配されたもののですね。そしてこの自己増殖は財を作ることを手段としてなされるので、生活や財そのものは目的にはなつていません。

二種類のお金

大工場の建物、巨大な商業用のビル、そして巨大な集合住宅、これらは建設産業の資本の自己増殖からすれば、短期間で建て替えるほど儲けられるので、およそ恒久的な建物の建設は不可能です。

そして、文化財という見地から見れば、科学・技術しかありませんが、しかし、その成果も社会的に役立てるという目的が灰色の男たちにはありませんから、現代の時間貯蓄銀行は環境破壊とか、廃炉にされた原発などの、将来世代に出費を強いるマイナスの文化財をどんどん残していくのですね。過去の時間貯蓄銀行からは毎年富が引き出されている事実と比べてみて下さい。こうして世代間倫理<sup>りんり</sup>が、いま大きい問題になつてきています。

世代間倫理を問題にするならば、現代の時間どろぼうが、将来世代の地下資源や環境を食い荒らしている、という問題にとどめず、今日の自由な人間に特有な隸属のあり方の批判にまで進まなければならぬでしよう。私たちは現在、ギリシャの奴隸制を倫理に反したものとして退けます。将来の社会の人たちの倫理からすれば、政治的に自由な現代人が、灰色の男たちと契約することで、資本に経済的に隸属してしまう、というライフスタイルそのものが倫理的に許せない事柄となるのではないでしようか。ギリシャにおいて、民主制が奴隸と自由人との統

一としてあつたように、現代人の政治的自由は経済面での隸属と一体となつてゐるのですね。ここではこの確認だけにとどめ、第V部で問題のありかについて探ることにします。

### 変動相場制と投機の常態化

再度現実にもどりましよう。灰色の男たちが産業資本から利子生み資本へと進化して以降の世界はどうなつているのでしようか。

金・ドル交換停止以降、試行錯誤の末、変動相場制に移行します。各国通貨の交換レートが固定したものではなくなつたことで、外国為替の売買で差益を稼ごうとする投機取引が増大してきました。

他方、コンピュータの発達で、金融機関のオンライン化が進み、八〇年代後半には各国の国際金融機関もオンラインで結ばれ、投機のための技術的条件が整えられました。外国為替の売買は従来は国際貿易にともなつて発生するものでしたが、今日では圧倒的に投機取引の方が多くなっています。今まででは昔話になつてしましましたが、八〇年代末には日本の金融機関が世界のトップクラスにランクされるようになり、その頃の銀行は、デイーリングルームを通じた

二種類のお金

投機で、巨大な利益をあげるようになつていていたのです。

その後投機の技術も進歩し、デリバテイブ（株式や外国為替などの金融商品から派生したもので、先物、オプションなどの取引がある）という手法が編み出され、ジョージ・ソロス（ヘッジファンドの主導者のひとり。アジアへの投資を引き上げることで、アジア経済危機を招き寄せたといわれている）のヘッジファンド（富裕な顧客から集めたファンドの何十倍ものポジション）が大もうけしたという話がありました。それも旧聞と（を取つて運用するハイリスク・ハイリターンな金融取引）が大もうけしたという話がありました。それも旧聞となり、アジア金融危機を経た今日では、金融システムの暴走をどのように規制するかということが、金融システムの当事者たちの頭にすらのぼるようになつています。そして、後進国への債権の棒引を提言している「ジュビリー・2000」（西暦2000年に「先進国からの援助」という名の借金に苦しむペーン。ジュビリーは、旧約聖書で負債が免除されるヨベルの年に由来する）の活動がNGOにとつて焦点となつてきてています。また、投機取引に都度課税するトービン税（ノーベル賞受賞者が提案したもので、投機取引に逐次課税することで投機を抑制しようとするもの）の導入を求めるATACC（トービン税の実現を目指して活動するフランス発のNGO運動）の活動も始まりました。灰色の男たちの発生する条件について、人びとは意識しはじめているのではないでしょうか。

14

## お金の根源

マルクス主義の問題点  
お金の秘密  
商品からの貨幣の生  
成  
お金は毎日つくられる  
お金の謎と物神性  
社会的無  
意識を変えること

### マルクス主義の問題点

エンデはマルクス主義について、マルクスの資本主義に対する批判の正しさを認めながらも、しかし問題を解決していく方法については誤っていたと述べています。

「マルクスの最大の誤りは資本主義を変えようとしなかつたことです。マルクスがしようとしたのは資本主義を国家に委託することでした。つまりわたしたちが過去の七〇年間、双子のようにもつていたのは、民間資本主義と国家資本主義であり、どちらも資本主義であつて、それ以外のシステムではなかつたのです。社会主義が崩壊した原因はここにあるのでしょうか。」

お金の根源

(『エンデの遺言』四〇頁)

エンデも別のところで述べているように、マルクス主義はプロレタリア階級の階級闘争を発達させて、ブルジョア階級を打倒し、國家権力を掌握しなければ社会革命は始められないと主張していました。この考えのもとにできたのが、ソ連をはじめとする社会主義諸国でした。社会主義諸国になつても新しい社会になつていないということで、スターリンが革命を裏切つたというスターリン主義批判がなされたりもしました。しかし批判勢力が事態を改善できないまま、八〇年代末から九〇年代初めにかけてソ連共産党の支配は足元から崩れていったのでした。

この事態にたいして「資本主義を変えようとしなかった」と指摘されれば返すことばはありません。結果として、マルクス主義の共産党は、資本主義を変えられなかつたのですから。とはいえる、マルクスもマルクス主義者も主觀的には資本主義を変えようと考えていました。ですから、エンデの評価は、マルクスには資本主義を変革していくための実践において誤りがあつた、という主旨として受け止めるべきでしょう。

ところが、本の方には出ていませんが、映像の方には、エンデが、マルクスの理論を資本主

時間貯蓄とお金

義を分析していく理論としてひじょうに高く評価している旨の発言が収録されています。「マルクスの偉大な功績は、経済批判を可能とする概念自体をつくり出したことにある」（ビデオ『エンデの遺言』より）。そうです、マルクスの『資本論』の商品の章には、商品を分析して、商品から貨幣がどのように生成されてくるかが明らかにされています。この分析がいま頗みられるべきときを迎えていきます。

### お金の秘密

エンデは「お金は人間がつくったものです。変えることができるはずです」（同、四一頁）と述べています。とはいっても、エンデは人間がどのようにしてお金をつくりだすか、については明らかにしていません。もしマルクスが商品論で書いた内容をエンデが知つたら、どんな物語ができたでしょうか。『モモ』で資本による人格に対する意志支配を見破っていたエンデのことですから、お金がどのようにしてつくられるかということも理解不能ではなかつたはずです。

貨幣は経済学では通常、物々交換の不都合を回避するためにつくりだされた交換手段とみなされています。諸商品は商品同士の直接交換は困難なので、いちど貨幣に代えておけば、欲し

お金の根源

い商品がなんでも買えるというわけです。でもこれではお金の秘密はなにも明らかになつていません。

マルクスは、商品—貨幣—商品という交換の形式で、商品と商品とが交換されるときの両者の同一性（共通性）に注目します。アリストテレスが、財にはふたつの用があり、一方は自然に属するが他方は人為的なものだと見抜いたことを踏まえているのです。また、日銀券などの通貨は、貨幣の流通手段としての機能を代行しているもので、それ自体商品ではありませんが、貨幣金の方は商品です。それで、マルクスは、商品それ自体に貨幣の性格がそなわつていると見て、このことを商品と商品との交換関係の分析から証明しようとしました。いわゆる価値形態論で貨幣の秘密が明らかにされています。

マルクスは小麦と鉄というふたつの商品の交換関係を分析し、両者が交換可能である以上、両者には同一性があると見、これは商品の価格として表示されている交換価値ですが、この価値の実体を社会のなかで成立している抽象的人間的労働、人間労働一般であることを示します。要するに、いろいろな商品が交換されているのは、それぞれが人間労働一般という共通性においてであつて、たとえ労働生産物ではないものでもこの尺度をあてられるのです。

時間貯蓄とお金

次に小麦と鉄との交換関係をマルクスは価値の現象形態、つまり価値表現の関係と見ています。ふたつの商品の交換関係のなかに人間労働一般というとらえがたいものが現象している、というのです。小麦と鉄とがお互いに交換可能なわけですから、小麦も鉄も、相手のなかに自分に等しいものを見て います。小麦は小麦、鉄は鉄ですから、これらの商品の使用価値は異なるものです。だから小麦はこの関係のうちにあつては、鉄を人間労働一般という抽象的で、感覚で捉えられないものと見なしています。そして、小麦は鉄と等しいという交換関係を結ぶことで、自身が抽象的人間労働としての鉄と等しいことを示しているわけですから、こうした回り道をして小麦も抽象的人間労働の担い手であることを明らかにしています。でもこうした事態は人びとの目には見えないのです。

この交換関係を人びとの日常感覚にそつて見直してみましょう。まずこの小麦と鉄との交換関係は、商品小麦の生産者が鉄となら交換してもよいと考え、他方、商品鉄の生産者がその意志にかかわらず、鉄が小麦と直接交換可能となつて いるということでした。鉄の生産者に小麦を購買する力がそなわるのは、小麦の生産者が鉄となら交換してもよいという交換関係を示したからでした。

お金の根源

マルクスはなぜ鉄の生産者に購買力がつくのか、ということを目に見えない価値の現象形態を頭の中で組み立てることによって証明します。先に見たように、小麦の鉄との交換関係で、小麦は異なる使用価値鉄に抽象的人間労働としての鉄を見、これと等しいものとして関係したのでした。だから、この価値関係で、鉄は鉄としての質ではなく、抽象的人間労働の体化物としての鉄として扱われているのです。つまり鉄は、鉄という質をもつたまま、この関係の中では抽象的人間労働の体化物とされており、したがって、ここでは、鉄は抽象的人間労働の化身なのです。

お金の秘密はここにあります。お金は、商品金が抽象的人間労働の化身とされ、価値の化身とされることで、他の商品を買う購買力をもつものに成り上garることを土台にして生まれるのです。

### 商品からの貨幣の生成

小麦と鉄との交換関係のなかにすでに貨幣の秘密が明らかにされましたか、しかしながら、鉄は貨幣ではありません。それはたまたま小麦の生産者の欲望の対象であつたことで、商品小麦

時間貯蓄とお金

の購買力を得ただけでした。

でも小麦の生産者は、設備資材のための鉄の他にもいろいろな商品が必要です。それで彼は、いろいろな商品に貨幣の力を与えていきます。そのとき、小麦の生産者と反対側の商品の生産者たちのことを考えてみましょう。小麦の生産者からもち掛けられた取引に、反対側の商品の生産者たちが応じていったとき、反対側の商品の生産者たちが自分たちの商品を小麦と交換したいと考えている、という関係が浮かび上がってきます。

この関係は、小麦以外の商品の生産者たちが、自己の商品を、单一の商品小麦と交換しようとする関係であり、あらゆる商品が小麦で価値を表現している関係です。こうなると、他の全ての商品の働きかけで小麦だけが抽象的人間労働の体化物とされ、他の全ての商品を購買できることになります。

ところがどの商品生産者も、自分の商品で全ての他の商品が買えればいいと考えます。皆が同じことをするわけですから、自分の商品を貨幣にするということは、単なる主観的願望に終わり、統一的な秩序は形成されません。

全ての商品生産者たちが、单一の商品で価値を表現すれば、その单一の商品が貨幣となり、

お金の根源

商品世界に統一的秩序が生まれる、商品たちはこのようなサインを人間に送っています。このサインを受けとつて、不本意ながらも人びとが、单一の商品金で、自分たちの商品の価値を表現したとしましょう。そうすると、ここで商品金は貨幣となります。

この貨幣を生成する商品生産者たちの行為を考えてみましょう。商品生産者たちは単一の商品金で自分の商品の価値を表現しました。だからこれは共同行為です。ところがこの共同行為は商品からのサインを受けとつたうえでのものでした。人間は商品に自分の意志をおき入れて、かの共同行為をなしとげたのでした。人びと同士の約束ごととして行為したわけではありませんから、この貨幣生成の共同行為は商品生産者にとっては、無意識のうちにおこなわれる本能的・共同行為だ、ということになります。お金はたしかに人がつくるのですが、そのつくれられた方は、商品に意志を支配されて無意識のうちにつくります。だから、お金を変えるのは簡単ではありません。

## お金は毎日つくられる

お金がどのようにつくられるかといつても、お札<sup>さつ</sup>がどうやってつくられるか、ということでは

SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

時間貯蓄とお金

はありません。商品を買う力がお金にどのようにそなわるか、ということでした。お金が商品生産者たちの無意識のうちでの本能的共同行為で生成されたものであることが判明し、そして、お金の商品を買う力は、商品生産者たちがお金となる商品で自分の商品の価値を表現することによつてもたらされるものであることがわかると、実はお金とは、毎日つくり出されているものであることがわかります。毎日つくりだされているから、お金を発生させる条件がなくなれば、お金もなくなってしまうでしょう。

商品生産者は、生産物を市場にもつてきて価格をつけます。価格をつけるということは、自分の商品の価値を貨幣で表現することでした。この商品生産者の行為は、毎日無数にくくり出されています。

当事者たちにはもちろん、この行為は、自分の生産物を売つてお金に代え、そのお金で自分に必要な商品を買って再生産したり、また自分たちの生活をしていくためのものでした。ところがこの行為がその裏面で、お金をつくっているのです。

商品生産者たちは自分たちの生産物に価格をつけることで、自分たちの商品の価値を貨幣で表現します。だからこの行為は、貨幣にたいして自分の商品に対する購買力を与えます。市場

お金の根源

に登場した人びとが皆同じことをします。彼らは意識せずに貨幣生成の共同行為に参加しています。そうです。彼らはいつたん貨幣になつた商品金で、自分の商品の価値を表現することで、日々新しく、単なる商品であつた金に貨幣としての力を与え続けているのです。

### お金の謎と物神性

マルクスは、事態をこのように説き明かしましたが、同時にこの解説が、日常的意識には受け入れられないことも自覚していました。マルクス自身が商品や貨幣の物神性ぶっしんせいと名づけた、これらものの謎的性格が、事態を転倒させ、混乱させているのです。

たとえば、貨幣の購買力は、全ての商品が貨幣商品でその価値を表現することの帰結として、貨幣に与えられたものでした。ところが、日常意識では、貨幣に価値があるから商品が買えると思われています。これが貨幣の物神性です。

先に見たように、貨幣の秘密は、小麦と交換関係にある鉄が、金属としての鉄でありながら、それが抽象的人間労働の体化物たいいかぶつとして、価値の化身けいしんとされていてるところにありました。この事態は実はこの関係のうちでだけのことですが、しかし、価値の現象形態が目に見えませんから、

時間貯蓄とお金

日常意識には小麦を買う力が交換関係という社会関係から生まれているとは見えず、鉄そのものの属性のように見えます。この見せかけは、貨幣が生成されると完成され、金は価値があるから貨幣となり、そして、他の諸商品を買えるのだと思われてしまいます。

お金をかえようと考えるとき、いつも問題になるのがこの物神性によつて、ほんとうのこところが見えなくなつてゐることです。

### 社会的無意識を変えること

エンデはマルクスの最大の誤りを「資本主義を変えようとしなかつたこと」に求めていますが、マルクスが『資本論』で、せつかく、貨幣がどのように生成されたかを明らかにしたにもかかわらず、それを変える方針を出せなかつた、という意味で、このエンデの見解は了解できます。

というのも、マルクスの方針は、労働者階級が政治権力を奪取することからしか社会革命は始まらないと考えていて、商品、貨幣を政治権力の力で廢止しようとしていたからでした。しかし商品からの貨幣の生成が商品生産者たちの無意識のうちでの本能的共同行為にもとづくも

お金の根源

のである以上、これを法律や強制といった意志の力で廃絶しようとしても無理がありました。そしてソ連の崩壊の要因はいろいろあります。この問題が根本問題だったのではないですか。ソ連はなぜ崩壊したのか、ということについて定見がありませんが、この観点からすれば理解が進むでしょう。

さて、資本や貨幣はエンデもいうように人間がつくりだしたもの。人間がそういうものの発生する条件をつくりだしたから、この世に生まれてきたのです。ですから、発生する条件をなくしてしまえば、これらは無になります。

人間がつくりだしたものでも、法律のような約束ごとですと変えることは比較的簡単です。しかし人間のつくり出すものには、社会的無意識によつてつくり出されているものが多くあり、これを変えていくには意志の力ではどうにもなりません。長い間に蓄積された生活の変化が、とつぜん社会的無意識のあり方を変える、ということまで待たねばならないのでしょうか。たとえば、貨幣が商品生産者の無意識のうちでの本能的共同行為によつて生成するものであることがわかれれば、貨幣廃止の法律をつくるのではなく、迂回して、<sup>うかい</sup>貨幣が発生しないような交易関係をつくり出せばよいのです。ということで、とりあえずここでは結論だけを示し、次の第IV

時間貯蓄とお金

部で、その具体的なイメージを描いてみましょう。そして、第V部では、思想的な考察を試みてみます。

# SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

意識の跳躍はすでに起きていた

21

意識の跳躍はすでに起きていた

エンデの提起を活かす エンデのイメージ 今後の方向性

### エンデの提起を活かす

すでに第18章でエンデによる科学知の量的思考に対する批判と意識の跳躍の必要性の提起について知り、また前章で芸術知の立場からの科学知の批判を見てきたうえにたって、エンデの提起を活かす道を考えてみましょ。

エンデの科学知批判の方法、つまり客観・主観の二元論の克服というのは、「人間の意識と世界とがわからがたくひとつにむすびついて」いる、という見地からのものでしたから、自我と意識を同一視しており、意識を、自我と対象との関係ととらえる視点をもちえていませんでし

新しい思考

た。

次に、芸術知の見地からの科学知批判は、科学知がとらえている世界の物質性の裏に隠された精神世界があり、科学知はこれをとらえられない、という内容になっています。

でもここで人間の社会そのものを二重化したものととらえる文化知の観点を導入したらどうなるでしょうか。エンデのいう量的思考や認識理念は、商品や貨幣や資本によつて歪められた思考であり、自然物そのものが社会的性格をもち、それらと関係することで、はじめて人間が社会関係に入つていけるという転倒した現代社会の人間関係によつて生み出されています。にもかかわらず、エンデによる量的思考や認識理念への批判は、人間の社会性のあり方へとは向わず、対象そのものが量的思考や認識理念によつてはとらえられない精神世界という領域をもつていてるという提言へと向かいいます。このような方向性を選ぶ以上は、エンデがいくらユーモアを呼び出してもオカルトの世界を開いてしまうことにならざるをえません。

人間の思考自体が、人間の社会性のあり方によつて歪められている、というように問題をたてれば、人間の社会性のあり方を変えていくことで、思考の歪みを治していくのであろうし、また人間の社会性のあり方を変えていく、という実践知の領域が開けてきます。エンデは芸術

意識の跳躍はすでに起きていた

家としての芸術的実践が社会変革のための実践とは異なることを正当にも強調しましたが、他方で社会変革のための従来の実践については、その可能性について否定的にみています。そのため、芸術的実践がもたらすであろう意識の跳躍にしか期待できなくなっています。でもエンデがこの考えをもつて到つた八〇年代初めとちがい、今日では従来の実践知とは異なる新たな実践知がその姿を見せ始めています。この事態について考察してみましょう。

### エンデのイメージ

わたしは、エンデが期待していた「意識の跳躍」は、今日ある意味では実現されていると考えています。もちろん、エンデが予想していたような形ではありません。それで、意識の跳躍についてのエンデのイメージから見てみましょう。テキストは、『オリーブの森で語りあう』です。

まず意識の跳躍を期待するに到るエンデの発想を整理してみましょう。エンデは今日の社会を「経済システムが一本立ちしてしまっている」（全集一五、二九頁）社会ととらえています。だれもそのシステムの舵かじをとらないし、またとれない。このことに気付きながらだれもがだんだ

新しい思考

ん早く回転するメリーゴーラウンドに乗っているように、なりゆきにまかせている、というのです。

このような宿命にとらわれた社会を打破する方向性として、エンデは「経済というのは文化の問題として理解すべきだ」（同、三一頁）と主張しています。ここで語られている文化とは「ライフスタイル、価値観、——こういつてよければ——生活態度の共通性」（同、三七～八頁）ということで「時代とか社会がもつてているもの」（同、三八頁）です。経済を調整するものはこの文化しかないのではないか、というのがエンデの考え方でした。

そうすると、この文化は鼎談ていだんがなされた一九八二年頃には「世界史全体のなかでほんとうの跳躍点に立っていると思える」（同、三八頁）ようになつていきました。この点についてエンデは次のように述べています。

「現在も進行中だけど、ここ四、五年のあいだにはつきりしてきたこと。それはね、一般に考えられているよりはるかに深いところで進行している意識の変化なんだ。ぼくたちは、あるひとつ発達において、とうとう終点にきてしまったんじゃないか、というのが実感だね。」

（同、三九頁）

意識の跳躍はすでに起きていた

エンデの念頭にある意識の変化は、マテリアリズム的な世界観に代わる「人間の意識と世界」とがわからちがたくひとつに結びついて」（同、三九〇四〇頁）いるというもので、質という概念を考え直すということでした。この内容は第18章で紹介しました。ここでは、この意識の変化がどのようにして起こるかということについてのエンデの予想を見てみましょう。

「現代の思考を一次元的なものにしたプロセスの正体がきちんとわかれれば、もうそれだけで、新しい思考が生まれてくるものかどうか。ぼくにはわからない。ただね、一種の突然変異が思考におきなければならない、『意識の跳躍』が必要だ、とは考へていて。」（同、四七頁）

「世界史の舞台においても、戦いの機が熟した瞬間というものがある。いわば運命のほうが、戦いのお膳立てをすっかりととのえているわけだ。」（同、五三頁）

エンデはこの意識の跳躍を、単に現代の思考を否定するだけのものとは考へていません。ましてや思考のうちだけでの跳躍でもありません。エンデが手がかりにするものは、現代の思考をゆきわたせた「工業技術」というのは、人間の共同体が創造したものであり、多くの人びとの共同体的作業や成果があるからこそ、自由に使いこなせるようになつていて」（同、五四頁）という事実であり、にもかかわらず、この工業技術を応用した経済が人間の統制を受けつけなく

新しい思考

なつてゐるということですから、必要なものは「自分の人生がこの世でひとつ意味をもち、全体は大きな意味のなかでつながつてゐる」（同、八一頁）と感じさせる文化にもとづいて共同体を再建することでした。シュタイナーの社会有機体三層化説をエンデが評価するのもこの考え方とかかわっています。

そこで出てくる課題は、一昔前は進歩的だとみられた既成の価値を破壊するということではなく、新たな価値を提案することではないのか、とエンデは問うています。

「ところが現在では、どこをさがしても価値なんてころがつてない。ずっとまえにみんな破壊されてしまつたからだ。ところがあいかわらず、大げさに革命家ぶつたり、荒らぶつたりしながら価値をこわしつづけている連中がいる。（……）それは新しい俗物だ。だが今日では、価値を提案するほうが、ずっと進歩的だし、はるかに大きな勇気もいるんじやないか。博物館のように過去の文化を回顧するという意味ではない。過去の文化の再現など、できっこないからね。そうじやなくて、新しい共同性を発見することが、ぜひとも必要だからなんだ。」（同、九

八頁）

エンデの提起している「新しい共同性」とは、すでに存在している共同体やあるいは共同体

意識の跳躍はすでに起きていた

のイメージではありません。それはなによりも文化の問題であり、価値の問題としてとらえられています。そしてその中身は、まさしく、現代の思考に代わるもうひとつの思考を提案することでした。

「まさしくそういう『意識の変化』を、ぼくたちは思想として理解しなくてはいけない。それに適切な名前をつけなくちゃならない。まったく新しいやり方で、人間の意識は、あらゆることがらにおいて、自分というものを知覚しはじめている。」（同、一四四頁）

エンデはハイゼンベルグやゲーテのことばを引いて、この意識の新しいあり方にについて説明していますが、その内容については後日に期しましょう。ここでは、意識の跳躍についてのエンデのイメージを知るのにふさわしいことばでしめくくりましょう。

「だがね、ある種の新しい能力というのは、ときにはきわめて唐突に、ときには飛躍的に、多くの人びとのあいだにひろがっていく。文字どおり精神の稻妻のように出現するわけだ。たとえば一六世紀に主知主義しゅちゅうという能力がひろまるまえには、たしかにだれも、そういうものが可能になるとは考えられなかつた。けれども三十年のあいだに、この新しい能力はヨーロッパの多くの人びとのものとなつた。今日ではけつきよく、どんな農民でも、中世の学識ある紳士

新しい思考

なんかよりは、はるかに知的だよ。一六世紀以来それは、まさに一般大衆の能力となつた。ぼくが思うには、おなじようにして、いままた新しい『心的能力』がひろがりつつあるんじやないか。それは手でさわって確かめることができるほどだ。予言的本能のようなものがあらわれてきている。それは、人びとの心のなかに新しい力として浮かびあがつてきている。今日いたるところで意識下の不安が感じられているが、まさにそれだつて、新しい心的能力が誕生するときの陣痛じやないだろうか。」（同、一二〇、一頁）

エンデは意識の跳躍について、このようなイメージを描いていました。このイメージでは明らかに意識の跳躍と世なおしとが結びつけられています。現実はどうでしようか。エンデの期待した通りではないにしろ、意識の変化は明らかに認められます。ただそれがストレートに世なおしには結びついていません。意識がかわることはたしかに世なおしの条件でしようが、世なおしが実現されるためには、意識の変化以外の諸条件がみたされねばならないのでしょうか。この意味で、今日では、変化した意識の下での社会運動の展望を描き出すことが必要となつてゐるのではないでしようか。

意識の跳躍はすでに起きていた

## 今後の方向性

エンデは現代の主知主義が主体と客体という二元論からなるマテリアリズムにおかされると見、そしてこの発想から問題をつきつめていくと、けつきよくは自分につきあたり、「人間の意識とはなにか」という問の前に立たされると述べています。「ぼくたちは『客観的』現実をさがしていたまさにその場所で、ぼくたちじしんの意識を、鏡に映しかえされるようにして手にいれる。」（同、一五頁）これが現代の主知主義の限界だとエンデはみているのですが、この限界で自分に返つてくることについて、エンデはゲーテの「なにも内側ではなく、なにも外側ではない。内側にあるものは、外側にあるのだ」ということばを引いて、これを「じつに精確に表現している」（同、一五頁）と評価しています。

この思考の限界について、わたしは次のように考えています。まずこの限界は人間の思考が言語記号を媒介にしていることとかかわっています。人間は対象を認識しようとするととき、対象と主体の間に両者を関係づける意識を働かせますが、その際、この意識が言語記号によつて社会的意識形態として外化させられています。この媒介者である社会的意識形態からすれば、内側である主体のなかにはなにもなく、また外側である対象のなかにもなありません。そ

新しい思考

こには内側にある主体と外側にある対象とが結びつけられた第三者があり、そこには内側にあるものは外側にある、という構造を見出すことができます。

言語記号のこの二重性に気づいた人は、ソシユールでした。ソシユールは言語記号をミニフィアン（意味するもの、音響心象）とミニフィエ（意味されるもの、概念）が紙の裏表のように結びついたものととらえました。この言語記号の二重性が、言語によって構成されている社会的意識形態に内側と外側とを結びつける働きをもたらしており、こうして人びとはこの社会的意識形態を媒介にして、みずから意識を交流させあうことができるのです。

ではどうしてこのようなことが可能なのでしょうか。それは言語自体のなかにコミュニケーションの機能が含まれていることによつて明らかにされるでしようが、このようなことはいまだかつて試みられたことはありません。従来の学説では、言語はコミュニケーションの道具とみなされていて、言語自体にコミュニケーションの機能を発見するという研究はなされてはいないのです。ところで、この新たな試みに挑戦しようとすると、ひじょうに有力な手があります。それこそはマルクスが『資本論』で解明した価値形態論に他なりません。

意識の跳躍はすでに起きていた

マルクス以前の経済学では貨幣は交換の道具ととらえられていて、貨幣自身に商品交換の機能が含まれているとは考えられていませんでした。もし、貨幣に交換の機能が含まれているととらえるならば、商品自体にその要因を求めなければならなくなります。商品の価値形態とは、商品に含まれている交換の機能の表現であり、マルクスは、貨幣を商品の価値形態の発展の極にある貨幣形態として示すことで、貨幣に商品交換の機能が含まれていることを明らかにしたのでした。

マルクスが商品の価値形態の秘密について解説したにもかかわらず、後に続く経済学者たちは、このマルクスの作業について理解できませんでした。マルクスの価値形態論は経済学者にとってはずつと謎のままでした。というのも、マルクスは価値形態の解説にあたって、科学知の方法を超えた方法（この科学知を批判的に再構成した知を、わたしは文化知と呼びます）を採用していたので、科学知の方法しか知らない今日の経済学者にとつては理解不能だったのです。

ところでエンデは目に見えないものの実在を主張した人でした。もしエンデがこの目に見えないものを、目に見える諸物の関係において、人間の社会性が現象するそのような現象形態と

新しい思考

とらえていたらどうなつたでしようか。そうすれば、マルクスの価値形態論はその核心において理解されたことになります。

ふたつの商品の価値関係にあつては、ふたつの商品の使用価値は眼に見えますが、価値の現象形態は眼に見えません。しかし、商品は、価値の現象形態をとることで、交換という機能をもつのですから、この眼に見えない価値の現象形態を解明することなしには、交換の機能を解明することはできません。そして、この現象形態は、自然物に社会的な力を与える形態規定の論理によつて認識することができます。

このマルクスの価値形態解明の方法を言語記号の解明に用いるとどうなるでしようか。ソシユールが発見した言語記号の二重性を出発点に置いてみましよう。言語記号をシリフイアンとシリフイエの二重性ととらえたソシユールの地平からの第一歩は、言語記号による名づけに際して、記号と対象との間に眼に見えない現象形態の実在を想定することです。そうすると、言語記号はこの現象形態によつて形態規定されて、単なる音でありながら、社会的なものである概念の化身けしんとされていることが解ります。わかこのことが解れば、人間は発話にあつては、單なる音をやりとりすることで、概念をゆききさせていることが簡単に了解できます。

意識の跳躍はすでに起きていた

このようにエンデの提起から出発し、それをより豊かなものにしていく方向性をしめしました。機会があれば続きを書こうと思っています。

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com